明治大学校友会　2024年3月10日発行
国分寺地域支部　会報第27号

4年振りの「新年会」開催～延年転寿の想いを込め

恒例の「新年会」が、4年振りで、1月20日（土）17時から、国分寺駅南口駅前「北海道」で開催されました。
参加者は31名、例年の新年会に比べ、若干参加者が減りましたが、4年振りでお酒も飲めることもあり、楽しい会合でした。ビンゴゲームには、皆様からたくさんの景品をご寄付頂きまして、深く感謝申し上げます。
会員の皆様の高齢化もあり、会合に足を運ぶことが難しい方もおいでになろうかと思いますが、新たな年を迎えるにあたり、「延年転寿」、無事に長寿を保ち、健やかに暮らすことを祈念したいと思います。

新年会幹事の皆さん

寄　稿

古城をめぐる～安土城址に思いをはせて　奥井　隆（昭 59・政経）

今から 4 年ほど前、定年少し前に会社を退職し、のんびり観光でもしようと思っていた矢先に、コロナ感染という経験したこともない事態に陥り、外出もままならない時期が暫く続きました。ワクチンなどが開発され、ようやく感染が下火になったので、近畿地方の城を訪れてみました。大河ドラマの「麒麟がくる」でも話題になった戦国時代の近畿地方の雰囲気を知りたく思ったからです。修学旅行や家族旅行で子供の頃、何回か行った事はあったのですが、社会人以降、特別日本史に興味をもつ事も無く、四十数年ぶりに訪れた関西地方のお城を散策することはとても新鮮でした。何か所かのお城を訪ねました。

駿府城、岡崎城、名古屋城、彦根城、姫路城など、深く歴史が刻まれた史跡は、それぞれの時代や土地柄を感じさせるドラマティックなものでした。そんな中で、私が一番興味をそそられたのが安土城址です。小学校等で学んだ知識では、織田信長が天下統一の拠点として造った城で、明智光秀に本能寺の変で殺害され、焼き払われた城という漠然とした知識でした。実際訪れてみると、今では長閑とも感じる滋賀県の一角にある城跡のその広大な敷地に圧倒され、当時の織田信長の絶対的な権力を感じざるを得ませんでした。400 年以上前に築かれた本城は、失われてしまっていますが、入山し、天守閣跡に続く長い石段を登り詰めると天主台跡が開けます。ここは、天主の地下跡で、当時はこの上に地上 6 階の豪華絢爛な建築物（天主）があったとのことですが、跡形がありません。資料や想像に頼るしか無いのですが、当時の織田信長のカリスマ性が感じられます。視点を変えると、現代の建築重機などないこのような時代に、山奥に石段を造り、城を建築した人足達（多分、普段は農業などに従事しながらまた、戦の時は、歩兵として働いたと思われる人々）の苦渋は如何なるものだったのかとも思います。再建されるお城が多くある中で、正確な建築時の図面がないなど様々な理由で、現状、安土城は再建が難しいとのことですが、逆に構造物がほとんど残っていない事で、当時の歴史背景や戦国武将の胸懐を考えると色々想像が膨らみます。歴史上有名な所なので訪れた方はいらっしゃると思いますが、興味のある方は行ってみては如何でしょうか。

天主台跡

原型を留める捻見寺の三重塔

寄　稿

250cc バイク、Off Road の先へ　丹治泰雄（昭 55・商）

昭和 55 年に商学部を卒業しました丹治泰雄です。卒業後は本田技研工業に就職し 35 年ほど勤務しました。そのほとんどの期間、埼玉県和光市で勤務しました。二輪車の整備、修理にかかわることで、海外の取引先を相手にする業務にたずさわりました。

結婚を機に、それまで住んでいた埼玉県上尾市からこの国分寺市に移りました。最寄り駅は国立で、はじめの頃は中央線で青山に通っていましたが、その後に勤務地が和光市になってからはバイク通勤でした。

数年前に退職し、二人いた息子は家を出たので、今は妻と二人、猫 2 匹で暮らしています。さいわい狭いながらも庭と呼べる土地があるので植木の手入れをして楽しんでいます。しゃがむ姿勢での作業が多く腰が痛くなりますが。あとは一日 8000 歩以上を心がけて散歩するようにしています。

国分寺は西に秩父、奥多摩、丹沢の山地へのアクセスが良く、月に数回バイクで山奥を探索しに行きます。未舗装路を求めて行き止まりまで行くことが多いので、バイクは小回りのきく 250cc です。ブラタモリという番組を見てにわかに地質という観点に関心を持ったので、岩を見て、これは海由来だとかマグマ由来だとか一人で納得したりしています。

月に一度、埼玉県の大宮まで出かけて高校時代の友人と麻雀をしています。ここ国分寺には知り合いが少ないので、どなたかお誘いいただければ都合のつく範囲であたま数合わせに参じます。

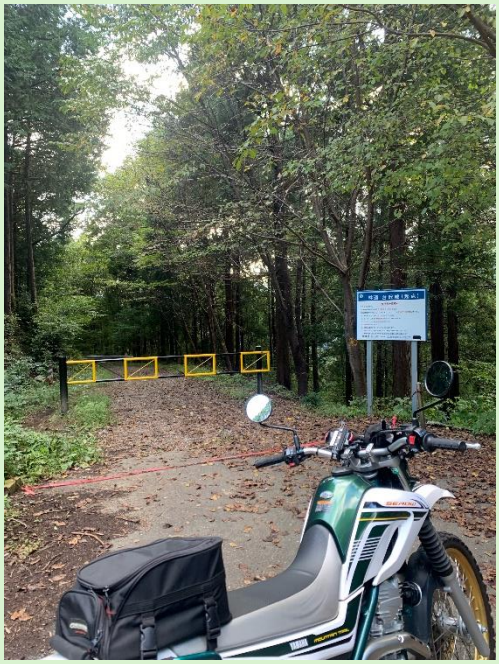

Photo Salon 家の周りの春

森谷俊雄（昭 48・理工）

毎年決まって福寿草

鳥がよく来る紅梅

片隅で派手なボケ

いつも気が付かない土筆

今はない

旧 4 小の桜

「朗読」だけは続けて行きたい、いつまでも

飯田由美（国分寺地域支部、昭 48・文）

1969 年、文学部に入学しました。当時はロックダウンや休講が多く、ノンポリの私は休講と知るや、和泉校舎の時は、明大前の名画座、駿河台の時は、飯田橋佳作座、そして地元の国立スカラ座での映画三昧でした。

卒業後は、亡き母の創業した国立駅前の不動産仲介業の事務所へ。法政大学卒業の弟と共に、地元で働き、半世紀余となります。

30 代初め、父母の故郷、信州・伊那谷出身の故後藤総一郎・明大政経学部教授の著書『遠山物語』へのファンレターがご縁で、先生の提唱された、柳田国男の学問と思想を学ぶ、「常民大学」での勉強会に参加。 勉強会で知り合った写真家・故中川賢俊氏の写真集『神棲む谷』に、「遠山へのラブレター」という詩文集を残せました。 2000 年、劇団民藝・田口精一氏の朗読講座に参加。その後、田口先生のもと、朗読の会「野火」の会員として 23 年、私自身が主宰する「野の風」朗読会を始めて 10 年余です。

ヴァイオリンの梓澤たまきさんやピアノの方々の演奏ともコラボ。「朗読の普及員」を自任しています。モーパッサン、小泉八雲、山本周五郎、松谷みよ子……そして伊集院静、などなど。幾つもの短編を朗読して来ました。「朗読」とは、愛惜する作家・作品へのオマージュ、そしてラブレターと思っています。

昨年初め、朗読会を支えてくれていた夫が死去。友人、知人の訃報も相次ぎ、落ちこみました。けれど、弟や友人たちの応援もあり、10 月は、ドラマティックリーディングの天田美保子さん、ピアノの吉村ひろみさんと「昔の家」でのジョイントコンサート、11 月、「ぶんぶんウォーク・朗読の小道」、12 月、「ウクレレ＆フラ・朗読ライブ」と、例年通り続行することが出来ました。　長年の乱読、乱視聴による雑学、そして幾人もの恩師からの教えが支えです。現在の私は、視力、記憶力の衰えに苦慮していますが、今は亡き人々の分まで頑張りたい。「朗読」だけは続けて行きたい、と願っています。